國學院大學「学びへのいざない」・國學院大學院友会発足 120 周年記念事業

沖縄研究のさきがけ　**釋　迢空**

折口信夫と沖縄

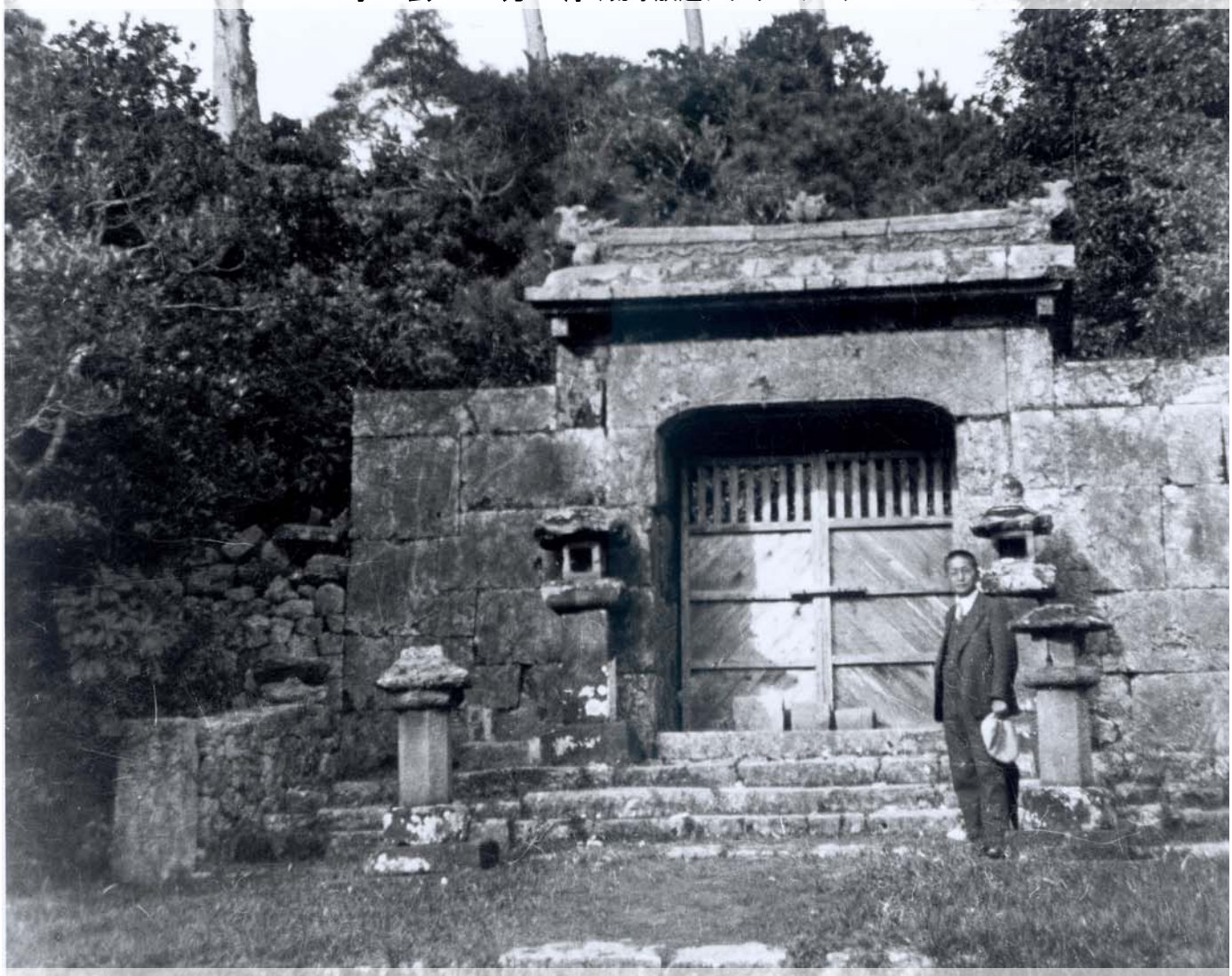
展　　示　平成 20 年 12 月9日（火）～14 日（日）

沖縄県立博物館・美術館　県民ギャラリー　10：00～17：00

「釋迢空おきなわ短歌賞」授賞式　12 月 14 日（日）13：00～13：30　講座室

シンポジウム　12 月 14 日（日）　13：50～17：00　講座室（先着 100 名）

基調講演　岡野 弘彦（國學院大學名誉教授）「折口信夫と沖縄」
小川 直之（國學院大學教授）「琉球文化と折口信夫」
パネリスト　三隅 治雄（芸能学会会長）
宜保 榮治郎（国立劇場おきなわ常務）
コーディネーター　狩俣 恵一（沖縄国際大学教授）
司　会　土方　淨（琉球放送アナウンサー）



主催　國學院大學・國學院大學院友会沖縄県支部

開催にあたって

南北約400㎞、東西約1000㎞にも及ぶ琉球列島では、海路による人や物の交流を続けながら独自の文化が形成されてきました。東アジアの結節点としての島々に継承・創造されてきた文化は、日本やアジア文化研究の上で重要な意味をもっています。こうした視点をもった研究者としては、伊波普猷や東恩納寛惇をはじめ、柳田國男、ニコライ・ネフスキー、折口信夫など多彩ですが、なかでも折口信夫は琉球の文化や社会の実地踏査を続けて、さまざまな資料を残すとともに、「まれびと」など、示唆に富む文化理論を提唱しました。

國學院大學は、明治20年代に沖縄県立尋常中学校（現・首里高校）で伊波普猷を教え、「おもろさうし」研究の道をひらいた田島利三郎をはじめ、宮良當壮、湧上元雄、外間守善など多くの琉球研究者を輩出してきました。これにちなみ、國學院大學院友会発足120年を記念し、改めて琉球文化研究に大きな足跡を残した折口信夫の業績を、諸資料の展示とシンポジウムを通じて検証することにしました。

また、歌人・釋迢空としての折口は沖縄滞在中に多くの歌を詠んでいます。このことから沖縄県での短歌振興を目的に「釋迢空おきなわ短歌賞」を設けました。

本展示会ならびにシンポジウムには、沖縄県教育委員会・那覇市教育委員会・琉球新報社・沖縄タイムス社・NHK 沖縄放送局・琉球放送・沖縄テレビ放送・琉球朝日放送・沖縄ケーブルネットワーク・ラジオ沖縄・FM沖縄・FM 琉球のご後援をいただきました。さらに県内企業ならびに有志の方々からは多大なご寄付を、國學院大學院友会・國學院大學若木育成会沖縄県支部には本事業にご協力をいただきました。

末筆ながらご後援・ご寄付・ご協力にあつく御礼申し上げます。

平成20年12月9日

國學院大學　　國學院大學院友会沖縄県支部

折口信夫と沖縄

大正9年（1920）に柳田國男が沖縄を訪れると、折口は、後を追うかのように大正10年7月16日に那覇の港に降り立つ。8月14日に那覇を出帆するまでの約1ヶ月間、首里、普天間から国頭の大宜味、喜如嘉、辺土名、奥間、辺戸、楚洲、安田、安波などを回る。それは伊波普猷、川平朝令、島袋源一郎や国頭では宮城聡、島袋源七らと交流を持ちながら、民俗文化を実地に見聞する旅で、斎場御嶽から久高島、津堅島にも渡り、新垣孫一らの知遇も得ている。

2度目の来沖は大正12年。7月31日に那覇に着き、8月17日までの間に首里や那覇、普天間、宜野湾、南風原などを回る。20日には宮古島を経て石垣島に渡り、登野城で盆のアンガマを実見し、アカマタ・クロマタの祭儀も知る。この旅では末吉安恭（麦門冬）、喜舎場永珣、岩崎卓爾など、さらに多くの人たちと交流をもった。折口はこれら2度の沖縄・八重山の旅を通じて、現在も精彩を放つ「まれびと」や「すでい水」、女人祭祀などの文化原理を見いだし、日本文化の古層に迫る「折口学」と呼ばれる独創的な学問体系を構築していく。

その後、折口は伊波普猷と沖縄行きを計画するが実現せず、3度目の来沖は昭和10年12月となる。國學院大學での教え子、大城元長・島袋全幸らの尽力で那覇市が招き、那覇と名護で万葉集講習会や国文学講習会などを行い、本部半島と国頭各地を回り、伊是名・伊平屋島を訪ね、久高島を再訪する。この来沖では、時局のなかで村々の祭祀の変貌に悩み、琉球芸能の振興に心を砕き、帰京後の5月には玉城盛重ら20名程を東京に招いて「琉球古典芸能大会」を開催する。そして、昭和13年には沖縄への思いを長編詩「月城の旗」に込めて発表し、戦後の昭和21年には脚本「上り口説」（執心鐘入縁起）を創作している。また、昭和11・13・15年には東京で「琉球新報」「沖縄日報」を購読している。

國學院大學折口博士記念古代研究所には、大正10年、12年と昭和10年末から11年初めに沖縄県各地を踏査した際に撮影した写真約250点、「沖縄採訪手帖」（大正 10 年）、「沖縄採訪記」（大正 12 年）などの民俗採訪記録類、東京で購読した新聞など、1000点を超す沖縄関係資料が保存されている。これらはいずれも大正・昭和期の沖縄を知る上で貴重な資料である。

折口信夫の沖縄の旅

沖縄島の島内交通は、1800年代末の明治時代後期に那覇―与那原、那覇―名護・国頭間、那覇―糸満間の客馬車が開設され、その後、軌道馬車が敷設されて移動時間は短縮された。そして、大正3年（1914）12月には那覇―与那原線、大正11年（1922）3月には那覇―嘉手納線、大正12年（1923）7月には那覇―糸満線の軽便鉄道が開通する。

折口が来沖した大正10年、12年、昭和10・11年には、こうした交通機関があり、折口がどう使ったかは不明だが、大正12年と昭和10・11年には3路線の軽便鉄道利用が可能だった。軽便鉄道の開設によって、島内の移動は便利になったとはいえ、嘉手納以北の国頭の旅は、現在に比べるとはるかに困難であった。

3回の沖縄と八重山の旅で、折口の足跡が明らかになっている所は以下の通りである。

●大正１０年

・7月16日　那覇着

・鈴木金太郎への8月3日付絵葉書に、国頭村を一週間がかりで歩き、那覇前田旅館に戻ったとある。

・7月17日から8月10日までの間に次のところを廻っている。

那覇市　那覇各地・首里各地、　**宜野湾市**　普天間など、　**国頭郡金武町**　金武など

国頭郡大宜味村　塩屋・大宜味・喜如嘉など、

国頭郡国頭村　辺土名・奥間・宇嘉・宜名真・辺戸・奥・楚洲・安田・安波など

うるま市　津堅島など、　**南城市**　久高島・斎場御嶽など、　**糸満市**　糸満・喜屋武・米須・摩文仁など

・8月10日に那覇出帆を予定するが、時化で延期となり、8月14日に出帆。

途中奄美大島の名瀬で再び時化のために2泊し、8月21日に鹿児島着。

●大正１２年

・7月18日に東京出発

・7月31日から8月17日頃まで沖縄島

那覇市　那覇・泊・安里・小禄・瀬長島など、首里各地、　**島尻郡南風原町**　津嘉山・兼城など

南城市　大里稲嶺など、　**浦添市**　浦添各地、　**宜野湾市**　普天間・宜野湾など

・8月20日　**宮古島**に上陸し5時間滞在（船の荷役の間）

・8月20日から8月28日　**石垣島**　**石垣市**　四ヶ（登野城・石垣・大川・新川）・平得・名蔵・宮良・白保など

・8月28日に台湾の基隆へ　　9月1日に門司に到着

●昭和１０年・１１年

・昭和10年12月20日那覇着

当間那覇市助役、永吉波上宮宮司、志喜屋二中校長、川平女師校長、大城那覇市視学などが出迎える

首里・那覇を見学後、夕方宝来館へ

・12月20日～　**那覇市**　那覇各地・首里各地、　**うるま市**　泡瀬・江洲など

・12月25・26日　**名護**で講演（国頭教育部会主催「国文学講習会」）

・12月27日～昭和11年1月8日　名護で新年を迎え、本部半島を廻る。

伊是名島、**伊平屋島**にはこの間に渡っている可能性大。

国頭郡本部町　渡久地・具志堅・伊豆味・崎本部など、　**国頭郡今帰仁村**　諸志など、　**名護市**　久志など

・昭和11年1月9・10日　**国頭郡国頭村**　宇嘉・辺土名・辺戸など　**国頭郡大宜味村**　大宜味・津波など

・1月11・12日　那覇で万葉集についての講演（沖縄国語研究会主催の「万葉集講習会」昭和会館）

・1月13日～15日　**久高島**、**斎場御嶽**などにはこの間に廻っている可能性大。

・1月16日　珊瑚座で組踊「女物狂」

・1月17日　高原安詩翁の女踊（泉崎の福地家座敷）、松蔭会の招待で天理教で組踊「執心鐘入」

・1月21日　波之上通り天理教別室で沖縄郷土協会の会員と座談会（琉球舞踊についての座談会）

宝来館で記者会見（「沖縄固有の信仰問題に就いて」）

・1月22日　内台飛行機「しらさぎ号」で那覇を発ち、太刀洗飛行場（福岡県筑前町）に帰着

折口信夫の沖縄民俗採訪資料

折口は、大正時代の2度の民俗採訪で、それぞれの地で聞き取ったことや同行者から教示されたこと、さらに沖縄で実見したことをノートに書き記している。大正10年の「沖縄採訪手帖」、大正12年の「沖縄採訪記」が代表的なものである。これらは『折口信夫全集』18巻に収録されているが、採訪手帖、採訪記の実物からは、沖縄で民俗を見聞する折口の息づかいがうかがえる。記録を急いでいるようなページ、書き直しをしているページ、目に映ずる場を丹念にスケッチして注記を加えているページ、写真を撮るとともに、厳密な記録化を図るために同じ場面をスケッチしているページなどである。

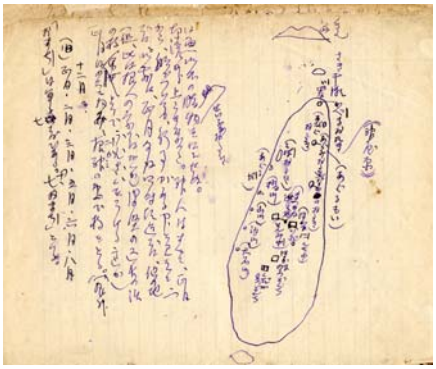
「沖縄採訪手帖」「沖縄採訪記」は、ともに随所にスケッチがあるのが特色である。折口の描写は的確で、たとえば大正10年には、久高島のノロ殿内・御嶽・泉などの位置図、津堅島の「ちきどんち」などを描いている。

大正12年には、首里・天界寺跡の三平等の殿内図、女性のハジチ図、石垣島・名蔵御嶽での供物図などを描いている。とくに、三平等（首里・真壁・儀保）の殿内を一つにして首里・天界寺跡に建てられた殿内の内部と祭壇のスケッチは詳細で、祭壇は写真撮影も行っている。名蔵御嶽の供物のしつらえも、スケッチとともに写真撮影を行っており、折口の学問の背景には、こうした事実の客観的把握があるのがわかる。

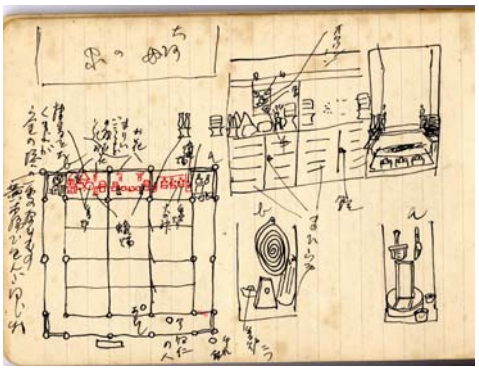
なお、大正12年「沖縄採訪記」は、別に調査時のノートがあり、これに見聞の記憶などを加筆しながら浄書して出来たものと思われる。

折口は、大正期の民俗採訪ではその見聞を記録に残している。しかし、昭和になってからの民俗採訪では、見聞記録を残しておらず、沖縄での2冊の民俗採訪録は、きわめて貴重なものである。

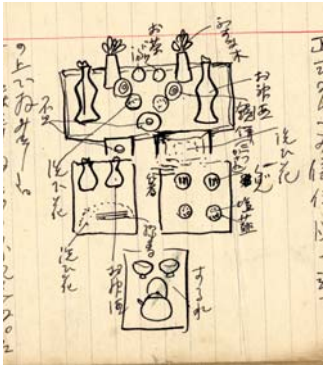
折口が残した沖縄関係のノート・手帖には以上のほかに、表紙に「今昔の琉球語」と記した琉球方言の整理帳、「沖縄神道記」と表紙に記した沖縄の神信仰ついての草稿などもある。



「沖縄採訪手帖」・久高島の図



「沖縄採訪記」・首里・天界寺跡の三平等殿内図



石垣島・名蔵御嶽の供物図

折口信夫沖縄写真

折口信夫は、大正10年（1921）8月3日に那覇から東京の自宅にいる鈴木金太郎に、絵葉書で「写真もたんととりましたが、感光させたもの、二重うつしも、すこしはある様で、残念です」と書き送っている。さらに、鹿児島に上陸してからの8月21日の絵葉書では「琉球でうつしたひるむだけ送ります」と伝えている。

絵葉書の文面で明らかなように、沖縄での大正10年の民俗採訪には各地で写真を撮り、さらに大正12年、昭和10年12月から11年1月の踏査でも写真撮影を行っている。大正12年には三上永人、昭和10・11年には藤井春洋が同行しているので、三上や藤井が撮影したものもあると考えられる。折口は撮影した沖縄写真を柳田國男著『海南小記』（大正 14 年刊）に提供し、昭和4年、5年刊の自著『古代研究』民俗学篇、国文学篇にも掲載している。

大正10年、昭和10・11年の写真は一部ネガも残されているが、沖縄や八重山（石垣島）の写真点数は現在までに合計243カット、277点が確認できている。この中には、提供者は不明だが、伊波普猷の『琉球古今記』・『孤島苦の琉球史』や田村浩の『琉球共産村落の研究』などに収録されている写真も含まれている。沖縄の画像資料には、これ以外に絵葉書が20点あり、今回展示する写真はこれらの中から画像が比較的鮮明なものを選んだ。

沖縄・八重山の大正時代、昭和戦前期の庶民生活の写真は少なく、また、残された写真の光景は、現在では大きく変貌している場合が多く、これらの写真は沖縄史や沖縄民俗学など、沖縄研究にとって貴重な資料といえる。

大正10年からすでに90年、昭和10・11年からは約75年が経っており、残された写真の撮影地・撮影年次を特定するのは困難だが、現在、折口沖縄写真に写された場の現況調査を続けている。展示では、撮影地が特定できた写真について、その現在写真と対比した。

展示写真には、撮影地を教示していただくために出したものが数点ある。撮影場所がどこであるのかお教え頂けたら幸いである。

波上宮　大正 10 年

首里城正殿　昭和 10・11 年

中城御殿　昭和 10・11 年

国頭村立奥尋常小学校　昭和6年

伊是名島・伊是名玉殿　昭和 10・11 年

久高島・外間ノロ　大正 10 年

石垣島・宮鳥御嶽中門　大正 12 年

石垣島・名倉御嶽への供物　大正 12 年

石垣市・アンガマア　大正 12 年

沖縄の人たちとの親交

折口信夫が昭和27年1月5日の「琉球新報」に寄せた「干瀬の白波」には、悲惨な戦争を体験した沖縄の人たちへの、折口の深い思いが表れている。「この短い通信を、わが沖縄の兄弟に送る。こんな文章のひきあはせで、互いにあきらめて居た我々どうしが思ひがけなく無事であったことを知ることもあるだろう。そんなかすかな頼みをかけて書くのである」と、記事に一縷の望みを託している。

折口は、大正から戦前にかけて3度来沖し、多くの同学や友人を得、豊かな、そして古層の日本文化を伝える沖縄びとの心を感じ取っている。「干瀬の白波」はこうした人びとの安否への焦燥である。

実地の踏査である民俗採訪を基盤とする折口の沖縄研究には、伊波普猷をはじめ多くの沖縄びととの出会いがあり、これがもとになって沖縄研究への途を歩む者もあった。伊波普猷とは生涯にわたって親交が続き、伊波は、後に沖縄学の父といわれる沖縄研究の潮流を築いていく。大正10年に折口を国頭で案内した島袋源七は、後に『山原の土俗』(炉辺叢書、昭和4年)を著し、宮城聡は後に上京して作家として活動する。県立図書館司書であった島袋盛敏は、後に成城学園教諭となり、『琉歌大観』などを著す。大正12年には、その才能を高く評価する末吉安恭にも出会い、多くのことを教えられている。

昭和10・11年の来沖では、國學院大學での教え子である大城元長、田端一村、島袋全幸らとの親交が深まり、本部半島や国頭を案内した仲宗根政善、宮城真治は、後に沖縄の言語や文化の研究者となっていく。

さらに折口は、沖縄の古典舞踊、沖縄劇の演者や役者たちとも交流をもち、沖縄芸能の振興に尽力する。

親交を結んだ沖縄びとについては、阪井芳貴の研究（「折口信夫と沖縄学と」）などによって次第に明らかになりつつあるが、交流は折口への献本や書簡類でもうかがうことができる。

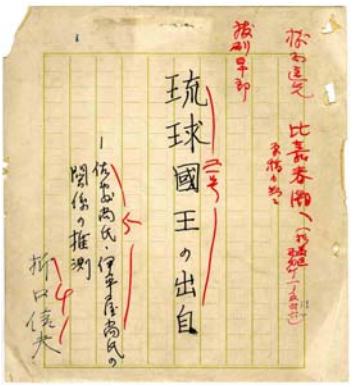
折口信夫の琉球研究

「まれびと」や「常世」をはじめとする、折口の理論の形成には採訪によって得た琉球文化が基盤にある。代表的著作である『古代研究』民俗学篇2（昭和5年6月、大岡山書店）の「追ひ書き」では、「私は、沖縄に二度渡った。さうして、島の伝承に、実感を催されて、古代日本の姿を見出した喜びを、幾度か論文に書き綴った。其大部分は、此本に収められてゐる。私のよい同行の友人の中にも、既に、南島研究に執する私の態度に飽いて、忠告と嘲笑とを、交々する人さへある」という。

ここでいう「論文」とは、具体的には「琉球の宗教」（大正 12 年5月）、「信太妻の話」（大正 13 年4・6・7月）、「最古日本の女性生活の根柢」（大正 13 年9月）、「古代生活の研究」（大正 14 年4月）、「翁の発生」（昭和3年1・3月）、「常世及び『まれびと』」（「国文学の発生第三稿」）（昭和4年1月）などのことである。これら以外にも折口には「琉球」「沖縄」を扱った次のような著作があり、琉球や沖縄への関心は生涯にわたっている。

大正 13 年　「沖縄に存する我が古代信仰の残孽」（大正 12 年の沖縄採訪の報告書）
昭和2年8月　「若水の話」『古代研究』民俗学篇1
昭和4年2月　「続琉球神道記」、島袋源七『山原の土俗』（炉辺叢書）
昭和4年4月　「琉球の宗教」『古代研究』民俗学篇1
昭和4年8・10 月　「組踊り以前」『民俗芸術』2巻8号・伊波普猷『校注琉球戯曲集』
昭和5年6月　「『琉球の宗教』の中の一つの正誤」『古代研究』民俗学篇2
昭和 11 年1月　「学会における沖縄」1・2「沖縄朝日新聞」1月 11・12 日（国文学講習会談話速記）
昭和 11 年1月　「過去及び将来における沖縄の宗教と芸術」1～3「沖縄朝日新聞」1月 17～19 日（講演記）
昭和 11 年5月　「沖縄舞踊に見る三要素」『新舗道』2巻5号
昭和 11 年6月　「組踊りの話」『日本民俗』12 号
昭和 11 年6月　「組踊復興への道」、同年5月の琉球古典芸能公演についての談話新聞記事
昭和 12 年3月　「沖縄固有の信仰問題に就いて」『沖縄教育』第 247 号（談話筆記）
昭和 12 年7月　「琉球国王の出自」『南島論叢』
昭和 21 年8月　「沖縄を憶ふ」1・2・3『時事新報』8月 29・30・31 日
昭和 22 年 12 月　「女の香炉」『沖縄文化叢説』
昭和 25 年6月　「同胞沖縄の芸能の為に」『宮古島縁起』プログラム
昭和 25 年8月　「同胞沖縄の芸能の為に」『演劇映画』2巻3号
昭和 25 年11月　「日琉語族論」季刊『民族学研究』15 巻2号
昭和 27 年1月　「干瀬の白波」『琉球新報』

昭和2年8月草稿「若水の話」



昭和 12 年7月「琉球国王の出自」

昭和 25 年 11 月「日琉語族論」

折口信夫が購読した「琉球新報」「沖縄日報」

折口は3度目の訪沖後、東京で「琉球新報」を昭和11年11月と昭和13年1月末から7月まで、さらに昭和15年2月から12月18日まで購読している。また、昭和11年11月と昭和13年1月末から6月まで、さらに昭和15年2月から12月にかけては「沖縄日報」も購読している。ほぼ同じ時期に沖縄の地元紙2紙を郵送で購読しているのであり、昭和11年1月の帰京後も、沖縄の動向に強い関心があったのがわかる。

昭和10・11年に沖縄を訪れた際には、折口は、戦時色が強まるなかで御嶽祭祀などの今後に悩み、また、琉球芸能の向上と振興に力を注ごうとしている。それは沖縄滞在中の講演録や談話からうかがえる。昭和11年5月の東京での「琉球古典芸能大会」開催、昭和13年の琉球王に関する長編詩「月城の旗」発表も、そうした折口の沖縄への思いの表れである。

折口博士記念古代研究所に現存する「琉球新報」・「沖縄日報」の本紙は上記の通りだが、昭和15年には政府の新聞統合政策によって地方紙の統合が始まる。沖縄では「沖縄日報」「琉球新報」「沖縄朝日新聞」が統合され、「沖縄新報」が創刊されるが、この統合は12月18日の紙面に、琉球新報・沖縄日報・沖縄朝日新聞は本日で終刊し、20日に「沖縄新報」が発行される旨の公告が掲載されている。

現在の「琉球新報」は昭和24年の創刊で、折口購読の「琉球新報」は旧紙のものである。「沖縄日報」は、昭和6(1931)6月に「沖縄日日新聞」として創刊され、翌昭和7年に「沖縄日報」に題字が変更された地元紙である。折口が購読した「琉球新報」と「沖縄日報」を見比べると、記事内容は「琉球新報」は地元沖縄の情報が中心となっていて、地元紙としての性格が強い。これに対し「沖縄日報」は、1面に戦時体制の状況を中心に内政・外交面の記事が多く、両紙は紙面の構成や内容が大きく異なっている。

折口が購読していた当時の沖縄地元紙は、戦災などでほとんどが失われており、折口の購読紙は戦時体制が次第に色濃くなっていく、当時の沖縄の状況などを知る重要な資料である。両紙とも國學院大學からマイクロフィルム版が沖縄県立図書館などに寄贈されている。

釋迢空歌碑

なはのえに　はらめきすぐる　ゆうだちは　　さびしき船をまねくぬらしぬ　　迢空

昭和23年3月刊の歌集『遠やまひこ』では、「那覇の江」として「那覇の江にはらめき過ぎし　夕立は、　さびしき舟をまねく濡らしぬ」「南の波照間島ゆ　来しと言ふ舟をぞ求む。那覇の港に」など5首をのせる。歌碑にある「那覇の江に」の歌は、『遠やまひこ』におさめる時に「はらめきすぐる」を「はらめき過ぎし」に変えている。

歌碑は、波上宮の参道階段の中ほど左側にあり、昭和58年9月に國學院大學卒業生を中心とする折口信夫歌碑建立期成会によって建立された。

謝　辞

國學院大學「学びへの誘い」「院友会発足 120 周年記念事業」として実施に到った「沖縄研究のさきがけ 釋迢空　折口信夫と沖縄」展・シンポジウム、「釋迢空おきなわ短歌賞」創設には、次の方々からご協賛・ご寄附をいただきました。ここにお名前を記して謝辞とさせていただきます。(順不同　敬称略)

(株)南都　オリオンビール株式会社　　波上宮　　医療法人おもと会　沖縄瓦斯株式会社　(株)森山写真商会
沖縄製粉株式会社　　沖縄県白蟻防除事業協同組合　　新中糖産業株式会社　　琉球セメント株式会社
沖縄森永乳業株式会社　　(株)守礼堂　　沖縄県観光事業協同組合　　(株)沖縄ダイケン　　金城建設
シンバホールディングス株式会社　　ジーマ株式会社　　(株)許田商会　　(株)普天間自動車学校
沖縄ツーリスト株式会社　　國學院大學若木育成会沖縄県支部　　國學院大學院友会沖縄県支部有志一同

「沖縄研究のさきがけ　折口信夫・釋迢空と沖縄」展示資料一覧

【折口信夫の琉球研究・民俗採訪資料】

1　折口信夫自筆　大正10年(1921)「沖縄採訪手帖」
2　折口信夫自筆　大正12年(1923)「沖縄採訪記」
3　折口信夫自筆　大正12年の沖縄採訪記録
4　折口信夫自筆手帖「今昔の琉球語」
5　折口信夫自筆手帖「沖縄神道記」
6　折口信夫自筆報告書「沖縄に存する我が古代信仰の残孽」(大正13年草稿)
7　折口信夫自筆原稿「若水の話」草稿(昭和2年頃)
8　折口信夫自筆原稿「琉球国王の出自」(昭和12年)
9　折口信夫自筆原稿「日琉語族論」(昭和25年8月)

【折口信夫沖縄写真】(番号にb、c、dが付いているものは、原則として現在の写真)

1a　国頭村辺戸の神女とアシャゲ(大正10年)
1b　国頭村辺戸のアシャゲ
2a　国頭村奥の学校の落成式のウスダイク踊(他から入手した写真、昭和6年か)
2b　国頭村立奥小学校
3a　國頭村・安田シノグ折目　山から下りてきた神(昭和13年1月再現、宮本演彦提供)
4a　國頭村・安波シノグ折目　山から下りてくる神(昭和13年1月再現、宮本演彦提供)
5　久志(名護市)のミンジョウガナシ(人形踊り)(福地唯義撮影)
6　大宜味村・塩屋浦のビジュル石(大正10年)(柳田國男『海南小記』にも掲載)
7a　大宜味村・津波の御嶽とアシャゲ　昭和8年建設(昭和11年1月10日)
7b　大宜味村・津波の御嶽社殿とアシャゲ
7c　大宜味村　津波の社殿・アシャゲの竣工碑
8　大宜味村・津波のアシャゲと神女(昭和11年1月10日)
9　伊平屋島・馬に乗る神女(昭和10・11年)
10　伊平屋島・馬に乗る神女(昭和10・11年)
11a　伊是名島・サバニで伊是名に渡った(昭和10・11年)
11b　伊是名島・ハーリ船
12a　伊是名玉陵(昭和10・11年)
12b　伊是名玉陵
13a　伊是名島・「北の松金」が耕作したと伝える「逆田(サータ)」
13b　伊是名島・逆田
14a　伊是名島・神女殿内とアシャゲ(昭和10・11年)
14b　伊是名島・ノロ殿内とアシャゲ
15a　伊是名島・勢理客集落(昭和10・11年)
15b　伊是名島・勢理客集落
16　江洲(うるま市)のノロクモイ(神女)(昭和10・11年)
17　平安座船(サバニ3隻を連結して、運送船として利用)(大正10年)
18　尚維衡妃の墓(大正 13年)(伊波普猷『琉球古今記』大正15年に掲載されている)
19　尚維衡妃の墓(大正 13年)(伊波普猷『琉球古今記』大正15年に掲載されている)
20a　首里久場川町のビンズルモー(大正10年)
20b　首里久場川町のビンズルモー
21a　首里城正殿(昭和10年・11年)
21b　首里城正殿
22a　首里・中城御殿の物見小屋(昭和10・11年)
22b　中城御殿跡
23　首里・天界寺跡に建てられた三平等殿内(大正12年)

24　首里・天界寺跡に建てられた三平等殿内（大正12年）
25a　三平等殿内の祭壇（大正12年・スケッチに対応する）
25b　大正12年「沖縄採訪記」・三平等殿内内部のスケッチ
25c　天界寺跡の位置
26a　首里・弁ヶ嶽（昭和10・11年）
26b　弁ヶ嶽
27　首里・弁ヶ嶽（昭和10・11年）
28a　波上宮（大正10年）
28b　波上宮
29a　那覇・オキナワの御嶽（伊波普猷『沖縄考』の口絵にある）
29b　オキナワの御嶽
30a　那覇・辻原墓地（サンモウジ）
30b　辻原墓地跡（三文殊公園）
31　那覇の市場（大正10年）
32a　斎場御嶽・大庫裡（聞得大君新降の大御居）（大正10年）
32b　斎場御嶽
33a　斎場御嶽・三角岩（昭和10・11年）
33b　斎場御嶽
34　摩文仁ノロ（大正10年）
35a　久高島のアシャギ（大正10年）
35b　久高島・アシャギ（中央）
36　久高島・久高ノロ（大正10年）
37　久高島・久高ノロ（大正10年）
38　久高島・外間ノロ（大正10年）
39　久高島・外間ノロとその家族（大正10年）
40　久高島・外間ノロウメーギ（昭和10・11年）
41　久高島・外間ノロウメーギ（背面）（昭和10・11年）
42　久高島の墓（田村浩『琉球共産村落の研究』昭和2年刊に収録されている。右が田村浩）
43a　石垣島石垣・宮鳥御嶽（メートゥリィオン）（大正12年）
43b　石垣島・宮鳥御嶽
44a　石垣島石垣・宮鳥御嶽（メートゥリイオン）の中門（大正12年、門には神女〈神司〉が座っている）
44b　石垣島・宮鳥御嶽の中門
45　石垣島石垣・宮鳥御嶽（メートゥリィオン）の威部（イビ）（大正12年、立っているのは岩崎卓爾）
46a　石垣島石垣・真乙姥御獄（マイツバーオン）（大正12年）
46b　石垣島・真乙姥御嶽
46c　石垣島・真乙姥御嶽
47a　石垣島登野城・美崎御嶽（ミシナギィオン）（大正12年）
47b　石垣島・美崎御嶽
47c　石垣島・美崎御嶽
47d　石垣島・美崎御嶽
47e　石垣島・美崎御嶽
48a　石垣島登野城・天川御獄（アーマーオン）（大正12年）
48b　石垣島・天川御嶽
48c　石垣島・天川御嶽
49　石垣島・八重山の大阿母（ウフアム）（大正12年）
50　八重山大阿母の辞令書（嘉慶9年（1804））（大正12年）
51　石垣島登野城・アンガマのウシュマイとンミー（大正12年）
52　石垣島登野城の弥勒面（大正12年）
53a　石垣島登野城・旧蔵元の火の神（大正12年）
53b　石垣島・蔵元跡

53c　石垣島・蔵元の火の神殿（絵図）
54a　石垣島石垣・権現堂神殿（大正12年）
54b　石垣島・権現堂
55　石垣島石垣・権現堂の鬼面（大正12年）
56　石垣島石垣・権現堂の獅子頭（大正12年）
57　石垣島・桃林寺山門
58a　石垣島石垣・桃林寺の仁王像（大正12年）
58b　石垣島・桃林寺仁王像
58c　石垣島・桃林寺仁王像
59　石垣島登野城・小波本御嶽（クバントゥオン）（大正12年）
60a　石垣島石垣・長田大主（ナータフージィ）の墓（大正12年）
60b　石垣島石垣・「長田大翁主之霊」碑（現在）
61a　石垣島平得・地城御嶽（ギシュクオン）（大正12年）
61b　石垣島平等・地域御嶽
62a　石垣島白保・波照間御獄（アスクオン）の拝殿（大正12年）
62b　石垣島白保・波照間御嶽
62c　石垣島白保・波照間御嶽
63a　石垣島名蔵・名蔵御嶽（ノーラオン）の神女〈神司〉舞（大正12年）
63b　石垣島・名蔵の御嶽
63c　石垣島・名蔵の御嶽
64a　石垣島名蔵・名蔵御嶽での祈りと供物（大正12）
64b　石垣島・名蔵の御嶽
65a　石垣島名蔵・名蔵御嶽での神女〈神司〉の祈り（大正12年）
65b　石垣島・名蔵の御嶽
66a　石垣島名蔵・名蔵御嶽への供物（大正12年）
66b　大正12年「沖縄採訪記」・名蔵御嶽への供物スケッチ
67　「上臈踊」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
68　「天川踊」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
69　「八重山・天川踊」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
70　「八重山・月夜浜節」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
71　「八重山・鷲の鳥節」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
72　「八重山・鳩間節」民俗芸術の会発行「民俗芸術研究資料写真」（昭和3年）
73　「古見浦節」
74　折口所蔵名護愛子ブロマイド（昭和11年6月作成）
75　沖縄の民家（場所不明）（昭和10・11年）
76　撮影地不明（昭和10・11年）
77　撮影地不明（昭和10・11年）
78　沖縄に向う船上(昭和10年12月）
79　名護町にて（後列右から3人目が島袋源一郎、4 人目が島袋全幸）（昭和10年12月）
80　名護にて（後列から仲宗根政善・島袋全幸・宮城真治）（昭和10年12月）
81　名護町にてか（昭和10・11年）
82　那覇・料亭にて（田端一村・当真嗣合・島袋全幸ら）（昭和10・11年）
83　那覇・梯梧の花短歌会の後か（泉國夕照・新崎盛珍・比嘉景常・島袋全幸ら）（昭和10・11年）
84　「琉球国王の出自」講演後（國學院大學講堂・郷土研究会）
85　折口信夫沖縄写真（現物・12点）

【沖縄の人たちとの親交を示す資料】

1　伊波普猷からの書状（「久米正雄の問題の作」である「安南の暁鐘」を読んで、安南でも榕樹をガジュマルと呼ぶことから語原について私見を述べ、さらにニライ・カナイの意味について意見を述べている。年月日不詳。）
2　伊波普猷の名刺（折口信夫に琉球舞踊古典劇開催にあたり漢那朝常を紹介する名刺）

3　伊波普猷作「祝詞に代へて（オモロ一篇）」（副題に「石川正通君の為に」とある。折口信夫が所蔵していた印刷物）
4　川平朝令からの書簡（昭和4年5月7日。『古代研究』民俗学篇1の礼状）
5　島袋源一郎からの書簡（昭和4年5月1日。『古代研究』民俗学篇1の礼状）
6　島袋源七からの書簡（大正14年3月27日。執筆した新聞記事の送り状）
7　島袋源七からの書簡（大正14年8月。東京でのお礼と沖縄に到着した報告）
8　島袋源七からの書簡（昭和5年11月28日。執筆した「琉球墳墓の研究」に対する指導の依頼）
9　島袋源七からの年賀状（昭和6年）
10　島袋盛敏からの書簡（昭和2年1月7日。那覇市立高等女学校で発行する『ひかり』への執筆依頼）
11　大城元長からの書簡（昭和4年9月13日。来沖中止に対する見舞い状。沖縄にいる院友の名があがっている）
12　大城元長からの年賀状（昭和6年）
13　大城元長からの書簡（昭和11年5月24日。琉球古典芸能の東京公演に対する沖縄側の状況報告と礼状）
14　比嘉春潮からの書状（沖縄人聯盟発行「自由沖縄」への伊波普猷追悼文の依頼。折口は昭和22年11月5日発行の同紙17号に「世界的な風格―伊波普猷さんを悼む―」を執筆。伊波普猷は昭和22年8月13日に死去）
15　昭和11年5月30・31日開催「琉球古典劇大会」の案内・入場券
16　「琉球古典芸能大会」開催に対する寄附・援助の依頼状（昭和11年5月26日）

【書　籍】

1　伊波普猷編『琉球文学研究』大正13年（1924）7月　青山書店
2　伊波普猷校『校訂　おもろさうし』第1－第8　大正14年（1925）3月　南島談話会
3　伊波普猷校『校訂　おもろさうし』第9－第13　大正14年（1925）6月　南島談話会
4　伊波普猷校『校訂　おもろさうし』第14－第22　大正14年（1925）9月　南島談話会
5　伊波普猷著『琉球古今記』大正15年（1926）10月　刀江書院
6　伊波先生記念論文集編纂委員編『南島論叢』昭和12年（1937）7月　沖縄日報社
7　伊波普猷著『日本文化の南漸』昭和14年（1939）10月　楽浪書院
（扉上部に「To Dr. Orikuchi with author's compliments」（折口博士へ　著者謹呈）とある。）
8　伊波普猷著『沖縄考』昭和17年（1942）6月　創元社
9　菊池幽芳著『琉球と為朝』明治41年（1908）5月　文禄堂
10　喜舎場朝賢遺稿『東汀随筆』昭和2年（1927）10月　球陽堂出版部
11　島袋源一郎著『琉球百話』昭和16年（1941）12月　沖縄書籍
（見返し遊び紙に「謹呈　折口先生　源一郎」とあり、奥付の裏には折口宛の著者からのはがきが貼り付けてある）
12　島袋源七著　炉辺叢書『山原の土俗』昭和4年（1929）2月　郷土研究社（復刻版）
13　島袋盛敏訳『球陽外巻　遺老説伝』昭和10年（1935）2月　学芸社
14　島袋全発著『沖縄童謡集』昭和9年（1934）6月　一誠社
15　宮良当壮編　炉辺叢書『沖縄の人形芝居』大正14年（1925）1月　郷土研究社
16　宮良当壮解説・宮良長包採譜『八重山古謡』第１輯　昭和3年（1928）4月　郷土研究社
17　宮良当壮解説・宮良長包採譜『八重山古謡』第2輯　昭和5年（1930）4月　郷土研究社
18　柳田國男著『海南小記』大正14年（1925）4月　大岡山書店
（「国頭のビジュル石」「久高島の外間ノロ」の2枚の写真を折口が提供している）

【折口信夫が購読した「琉球新報」「沖縄日報」】

「琉球新報」（11 点）

昭和11年11月26日、昭和13年2月2日、昭和13年4月20日、昭和13年5月20日、昭和13年6月16日、昭和15年2月11日、昭和15年2月27日（送付帯付き）、昭和15年7月9日、昭和15年12月7日、昭和15年12月14日、昭和15年12月18日

「沖縄日報」（９点）

昭和11年11月17日、昭和13年2月2日、昭和13年4月20日、昭和13年5月20日、昭和13年5月31日、昭和15年2月11日昭和15年6月5日、昭和15年12月14日、昭和15年12月18日

【折口信夫年譜写真】

1　明治24年 折口信夫 4歳
2　明治37年(17歳) 天王寺中学の短歌会
3　明治38年(18歳) 天王寺中学卒業時
4　明治38年(18歳) 天王寺中学卒業時[裏]
5　明治39年(19歳) 國學院大學予科2年
6　明治40年4月　金沢庄三郎の「辞林」の編纂を手伝う
7　大正6年(30歳)『口訳万葉集』3巻出版 アララギ同人となる
8　大正9年11月 赤城山登山
9　大正10年3月31日午後　折口宅にて柳田國男の渡欧壮行会
10　大正10年10月9日 齋藤茂吉の渡欧送別会
11　昭和2年 三矢重松五年祭・院友会館
12　昭和3年 郷土研究会
13　昭和5年3月 藤井春洋・國學院大學卒業記念写真
14　昭和5年 鳥船短歌会遠足
15　昭和5年 鳥船短歌会写真「とりふね」の同人
16　昭和5年1月10～12日　松本「折口先生の会」この後、新野の雪祭りに行く
17　昭和5年2月　鳥船短歌会による『春のことぶれ』出版記念会
18　昭和5年11月 師範部・源氏物語講義
19　昭和7年1月6日～10日 三河・大入の花祭り調査
20　昭和7年9月30日 晩翠軒にて「定型問題座談会」
21　昭和9年2月 郷土研究会
22　昭和10年 とりふね
23　昭和10年1月 那智丸船上の折口信夫・春洋
24　昭和10・11年の沖縄調査
25　昭和11年1月 沖縄県名護町での記念写真
26　昭和11年7月 鶴岡市春日神社 三矢重松歌碑除幕式
27　昭和13・14年頃『新万葉集』(昭和10年・改造社)完成祝い
28　昭和14年10月29日 百草園へ 鳥船社同人
29　昭和14年10月 百草園にて 鳥船社同人
30　昭和16年4月 明日香村石舞台の折口信夫・春洋
31　昭和17年1月 大井出石の自宅にて
32　昭和22年7月 箱根・叢隠居へ向かう折口・柳田
33　昭和23年 國學院大學での講義
34　昭和23年頃『水の上』出版の頃
35　昭和24年春 水虎像を前にして
36　昭和25年 國學院大學文学第一研究室
37　昭和25年10月 東京駅・伊勢への旅
38　昭和26年 大井出石の自宅にて
39　昭和27年 金田一京助喜寿祝賀会
40　羽咋一ノ宮 墓誌

沖縄研究のさきがけ 釋迢空・折口信夫と沖縄
編集:國學院大學折口博士記念古代研究所 小川直之
発行:國學院大學院友会発足 120 周年記念 沖縄県支部事業実行委員会
発行日:平成 20 年 12 月9日

表紙:昭和 10・11 年 弁ヶ嶽